

## 生活文化の保全対策について（案）

平取ダム建設予定地周辺におけるアイヌの伝統文化に関わる生活文化の保全対策について、具体的な保全対策を整理するにあたり、以下のようなことに留意することが必要と考えられる。

生活文化の保全対策に関わる対象は、「アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書」に記載されている該当分野を基本とする。

具体的には、アイヌ文化に関わる資源確保のうち、かつて行われていたことが証明された耕作や栽培の様式、コポンチカルと呼ばれる川の氾濫によって形成された洲を利用した、いわゆる川洲畑などを基本的な内容とする。

- 1) かつて行われていた栽培様式が再現でき、それによってアイヌ文化を伝承できるように、かつ、その様式を多くの人々に理解させるために提示できるように考慮した保全対策を検討する。
- 2) 河川周辺の空間を利用した川洲畑の試験的实施等について検討する。

## アイヌの人たちの農耕 - 「川洲畑」 - について

(参考文献 : 「アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書」 2006 年 3 月 p.255 ~ 256 )

### 1 . アイヌの人たちの農耕

一般に農耕の場としてアイヌの人たちが最も好んで畑を開いたのは、春先の雪解けの大水が引いたあとの川べりの泥の堆積した部分で、その泥の上にムンチロ(アワ)、ピヤパ(ヒエ)、ソンパ(ソバ)を蒔いて農作物を作っていました。この農法をコボンチカル(川洲畑)といい、ヤナギ類を払って日当たりをよくすると作柄がよくできました。また、“大洪水のあった次の年は、川洲畑は草も生えないし畝を切つてすぐに種を蒔くと秋になればどっさり穀物が実る” そうです。(萱野茂 1996 『萱野茂のアイヌ語辞典』 p.454 )

### 2 . 農耕の場としての宿主別

1940(昭和 15)年代の宿主別に住んでいた E さん・F さんの母親はピヤパ(ヒエ)、アントウキ(アズキ)、ダイズ(-)、タカキミ(タカキビ)を栽培していたそうです。その頃の宿主別川の河原では、畑を起こさずに、河原の土を寄せて盛り上げ、畝を作って畑にしていたそうです。肥料を入れたのは見たことがなく、畑は一町五反歩ぐらいあったそうです。

### 3 . 平取ダム建設予定地内での農耕に関する調査結果

2004(平成 16)年、2005(平成 17)年度に生態系遷移ワーキングチームの山田悟郎氏により土壌の花粉分析調査が行われました。2004 年度の調査では、平取ダム水没予定地近くのスズラン群生地付近で樽前山噴火の 1667 年以前の地層(樽前 b 地層 Ta - b)からソンパ(ソバ)の花粉が検出されました。

あまり遠くに飛ばないソンパの花粉検出により、この付近で 17 世紀中ごろにソンパ栽培が行われていたことが判明しました。(山田悟郎 2004 「生態系遷移検討ワーキングチーム・レポート」 p.5)